

社会福祉法人笠木福祉会 放課後等デイともだち

こどもの最善の利益を求めてー「ともだち」の願いー 管理者：中根賢明

この4月から「ともだち」の管理者をさせていただく中根賢明（理事長）です。

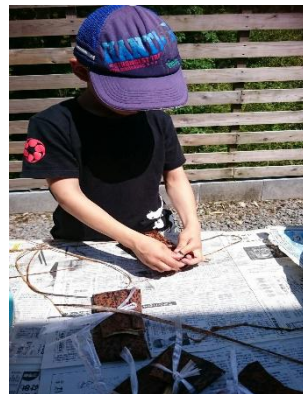
放課後等デイの目的は、その日学校を終えたこどもが家に帰るまでの間**《安心して過ごせる場、そのことで親が安心して仕事や社会的活動、あるいは休息することを保障する》**こと。そして《こども一人ひとりが最善の利益となる育ちができる》ように支援すること。つまりこどもたちがそれぞれ「発達の主人公」「生活の主人公」になれるように支援することです。そのために保護者（家族）と学校との《信頼の上にたった連携・協力》が必要です。

では**放課後等デイでどんなことを行うか**。家庭や学校で行うことを補う活動もありますが、家庭や学校では十分に行えない異年齢で学校も異なるこどもたちが、一緒に楽しく遊び、自分たちの放課後等デイでの生活を協働してつくり生活することです。そのためにともだちとの付き合い方、話の仕方、トラブルの解決法（話し合いの仕方）、社会での振る舞い方などの《社会的スキル》をいろいろな場面をとおして育てます。

こどもたちが「発達の主人公」「生活の主人公」ということは、親や教師などの大人の指示にしたがうこと、言うとおりに振る舞えるようになることではありません。自分で考え、自分の力で（必要なときは回りの力を積極的に借りて）、自分の生活をつくり、自ら発達してゆくことです。ですから、こどもに指示する場合は、かならず本人が「そうだ！」とわかるように理由を話すことが大切です。理由も説明せず「親の言うことを聞け！」という命令は厳につつしんでください。それでは自分で考え判断できない「生活の主人公」になれず、指示命令がないと行動することも考えることもできない子になるからです。

あくまきを作ったよ。～郷土料理を味わう！

鹿児島県の郷土料理であるあくまき、昔は、家の田植え時の保存食でした。アルカリ性の灰汁で炊くことでアルカリ性食品です。子どもたちに「あくまき作り」を提案したら、「去年も作ったよね!」とか「おいしいよね」「また作りたい」と期待する姿がありました中には「僕は苦手だから食べたくない」との声もありましたが話をしていくうちに作ってみようかな。という気持ちになってくれたので12日に話し合い、28日に作ることにしました。



12(土)・あくまき作りに必要なものを準備しよう。

何が必要か話し合うと、「燃える物」「もち米」「竹の皮」が意見としてあがりました。

まずは「燃える物」の準備として子どもたちから、「薪」「木?」「葉っぱ?」などの意見が出て、薪は買うこととして、その薪が燃えるように落ち葉拾いに出かけました。「濡れてたらだめだよ。だって火が付きにくいから。」「カラッカラがいいね」「杉の木燃えそうじゃない?」「枝とかもいいかも」「沢山いるよね」などあくまき作りのためにと考えて集めていました。

次に、「あく」や「竹の皮」はどここの場所に売っているか?買物に行って店内で探しながら買い物をしました。

そこで、一緒に実際に市販のあくまきを買ってきて、きな粉を付けるのと付けないのとで実際に食べてみました。

食べて何もつけないと癖が強く「苦い」「苦手」という声もきな粉をつけて食べると「全然違う」「付けたらおいしい」という声に変わりました。28日に作るあくまきの仕上がりをイメージできたようす。

26日(木)……灰汁作りをしよう。

ザルの上にさらしを広げて、そこに灰を載せて水をかけ、灰汁作りをしました。「泥んこだよー」「これがあく??」「下から出る水は泥じゃないね」「なんで泥みたいのからこんなにきれいな色になるんだろう?」など変化に驚きながら作業をしていました。

27日(金)……明日はいよいよあくまき作りだ～前準備を済ませよう～

竹の皮を水に浸けておきます。明日あくまきが包めるように皮を柔らかくするためにみんなで、協力し水に浸けてくれました。すぐに柔らかく変化する竹に触れて「明日、これで巻くんだよね」と期待が膨らむ姿に嬉しく思いました。また、作っておいた灰汁にもち米もつけておきました。

28日(土)……さあ!あくまきをつくろう!

朝の会で作る手順を確認してから、あくまき作りをする「蛭」へ出かけました。

みんなで下準備をしておいた灰汁につけたもち米を竹皮にのせました。

米を載せすぎたり、竹皮がうまく巻けず苦戦しながらも自分の手で作業し上げることができました。ゆうしん君が「ひもがうまくできないよ」と何回もひも結びに挑戦し、

支援員が方法を伝えると、時間をかけつつもしっかり結び完成でき、自信に満ちた表情をしていました。帰りの会でもその喜びを話してくれましたよ。

ナイロン紐ではなく、竹の皮の細くさいたものをひもにして結ぼうとすると手加減が難しくすぐに切れてしまいますが「もう一回」と何度も挑戦して、経験を積みちゃんと結びきりました。たける君は、一人一人が包んだあくまきを丁寧に鍋の中に並べてくれました。



あくまきを煮ている間も近くの公園へ出かけて遊んだり、お弁当を食べて楽しく過ごしました。

「そろそろできたかな?」と竹皮を開く様子をじっと覗いているこどもたち。「わあ!」「おいしそう」「テカテカ」「もちもち」「いい匂い」「早く食べたい」との声!早速お皿に取り分けて(きな粉と、砂糖と塩少々まぜたもの)を付けていただきました。「おいしい!」「お店のより苦くない」「柔らかい」「お母さんたちにも食べてもらいたい」「作るのは楽しいけどやっぱりいらない」と言う姿もありましたが、自分たちで、作り上げた喜びをかんじていました。また、五感をいっぱい使い、故郷の文化にも触れることのできた活動となりました。